氏名	木内　麻理子
ヨミガナ	キウチ　マリコ
学位の種類	博士（音楽学）
学位記番号	博音第267号
学位授与年月日	平成28年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉　ガブリエル・フォーレの歌曲における和声語法 ―ギュスターヴ・ルフェーヴルの『和声論』(1889)との関連を中心に― 論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	片山　千佳子
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	土田　英三郎
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	大角　欣矢
（副査）	東京藝術大学	准教授	（音楽学部）	福中　冬子

（論文内容の要旨）

ガブリエル・フォーレ（1845～1924）は、自分自身の作品や作曲法について語ることは生涯ほとんどなかった。しかしながら、彼の音楽語法は、和声や転調方法等に現れている通り、独特である。とりわけ、フォーレの和声語法については、多くの先行研究がニデルメイエール古典宗教音楽学校で受けた音楽教育からの影響に言及し、教会旋法との関連を指摘してきた。フォーレが卒業したこの音楽学校は、優れた教会オルガニストと聖歌隊指揮者の育成を目的として、単旋聖歌とその伴奏法や16～19世紀の教会音楽を重点的に教えた学校であり、19世紀当時のパリ音楽院の教育とは、いくつかの点で非常に異なる性質をもっていたのである。しかしながら、フォーレが受けた音楽教育が特徴的であったとしても、先行研究において、フォーレの音楽語法とニデルメイエール古典宗教音楽学校との関連を深く掘り下げて研究した先行研究は、従来ほとんどなく、具体性に欠けている嫌いがある。このような先行研究の状況に鑑みて、本論文では、ニデルメイエール古典宗教音楽学校で実際に使用された、現存する2つの教科書をもとに、フォーレの和声語法のインスピレーションの源泉についての仮説を立てることを目的としている。すなわち、本論文は、ジョゼフ・ドルティーグとルイ・ニデルメイエールが共同執筆した『単旋聖歌伴奏の理論と実践』(1857）とギュスターヴ・ルフェーヴルの『和声論』(1889）を参照し、フォーレの歌曲における和声語法との相互関係を明らかにする試みである。

本論文で扱う歌曲（メロディー）は、フォーレが作曲家としてのキャリアの最初期から亡くなる数年前まで創作を続けたジャンルで、多くの作品が残されているが、フォーレの歌曲、とりわけ初期の歌曲についての研究は未だ非常に少ない状況であることを考慮して、本論文ではフォーレの最初期の歌曲が所収された『歌曲集第1集』も扱うことにした。また、フォーレの和声語法との関連がとくに考えられるルフェーヴルの『和声論』(1889）は、19世紀のフランスにおいてドイツ語圏の和声理論（音度理論）をおそらく初めて取り入れた和声論であり、音楽理論の面からみても興味深い特徴を多く含んでいる。ルフェーヴルは、実践可能な新たな和音や当時としては非常に斬新な転調方法を考案し、調の概念を拡大した。その特殊性によって、本論文では、通常では作曲の基礎を教えるために音楽学校で使用されるはずの和声学の教科書と作曲家の音楽語法との関連を追究することが例外的に可能になった。

第1章では、ニデルメイエール古典宗教音楽学校（1853年創設）をめぐる19世紀中葉のフランスでの教会音楽の状況や古典宗教音楽学校の教育カリキュラムと機関誌『メトリーズ』等について概観した。古典宗教音楽学校は、19世紀の中葉に始まる単旋聖歌の復興運動と深く結びついた音楽学校であり、まさに19世紀フランスの政治状況と教会音楽の状況との産物であった。一方、古典宗教音楽学校では、第3代校長兼作曲家であ

るルフェーヴルの手によって、創設当時から20世紀に至るまで、教育カリキュラムが変えられることはほとんどなく、単旋聖歌と教会音楽についての教育が徹底して行われた。

第2章では、ルフェーヴルの『和声論』の特徴を浮き彫りにするために、同時代にパリ音楽院で公式教科書として採用された3つの和声論（サヴァール、バザンとルベール）とルフェーヴルの『和声論』との比較を行った。また、ウジェーヌ・ジーグが自筆原稿として残した『授業録』（ギュスターヴ・ルフェーヴル、『和声論』）についても言及した。上記の3つの和声論との比較の結果、ルフェーヴルの『和声論』には、和音（変位和音や「半音音階の和音」）、和声進行（3度進行や5度連鎖による和音進行）や転調方法（様々な和音を用いた共通和音による転調や「仮想和音」による転調方法）の点に特徴が認められた。

第3～5章では、第2章で明らかになったルフェーヴルの『和声論』の特徴をもとに、フォーレの『歌曲集』全3集を分析した。すなわち、ルフェーヴルが提案した和音記号を用いることによって、つまりルフェーヴルがしたであろう和声分析を再現することによって、フォーレの歌曲の和声語法の特徴を明らかにした。

その結果、フォーレの歌曲は確かにルフェーヴルの和声概念の範囲内で解釈することが可能であると同時に、ルフェーヴルが考案した和音記号がフォーレの作品の和声語法を解釈するのに適していることが明らかになった。フォーレは、古典宗教音楽学校で学んだルフェーヴルの和声論に特有にみられる、当時としては斬新な和音や転調方法をもとに、それらを自身の作曲に取り入れながら、さらに独自の和声語法を発展させていったのである。

（総合審査結果の要旨）

本論文は、フォーレGabriel Fauré(1845～1924)のしばしば「曖昧」と評される音楽語法について、約45年間にわたって作曲され続けた《歌曲集》全３巻60曲を分析対象として限定し、フォーレが11年間学んだニデルメイエール古典宗教学校（1853設立）で教えられていたジョセフ・ドルティーグとルイ・ニデルメイエールの『単旋聖歌伴奏と実践』(1857）による和声教育の影響と、そこで教鞭をとったギュスターヴ・ルフェーヴルGustav Lefèvreの『和声論』(1889）を手掛かりに読み解こうと試みたものである。

第１章はニデルメイエール校の19世紀後半における独自な位置に触れ、２章は当時のパリ音楽院での和声教育で使われた３種の教科書と対比させる形で、ウジェーヌ・ジーグによるレフェーヴルの『授業録』の自筆原稿を参照しつつルフェーヴルの和声論の「音度理論」としての特徴を詳しく叙述している。第３、４、５章は、それぞれフォーレの『歌曲集』第１巻から第３巻までにおける各曲について、実際にルフェーヴルの和音記号を使って分析を行い、結論として、フォーレ語法の「曖昧さ」はルフェーヴルの和声と調性の捉え方を援用することで説明可能である、という「仮説」を立てて終わっている。

分析結果に関してあえて「仮説」と言わざるを得なかった点に、この論文の立脚点の弱さのすべてが露呈していると言えよう。また、和音解釈に疑念がある箇所や、ルフェーヴル独自の「半音音階の和音」についての誤解も散見された。全３巻にわたる分析は単に「ルフェーヴルの和音記号を使えば、この箇所の和声進行はこう分析できる」という局所的な相関性を指摘するだけで終わってしまっていて、フォーレ語法の独自性の解明に踏み込めているわけではない。そのためには、対位法的な声部進行や近代の旋法性についての明確な把握が必要であり、全体の論述方法自体を見直さざるを得ないであろう。

結局、本論文の問題点は、申請者の目的がフォーレの音楽語法を解明することなのか、ルフェーヴルの和声理論の可能性を理論史的に論じようとしたのかが明確でない点にある。しかし、ルフェーヴル理論を紹介した上でフォーレの《歌曲集》全３巻を丹念に分析し、限定された仕方ではあるが「ルフェーヴルの和声理論という枠」を通して見えた側面を具体的な形で記述した点に、一定の学術論文としての価値を認める。